

タイトル	「教職インターンシップ」実践報告：北海学園大学 教職課程の2年間の試み
著者	前田，輪音
引用	北海学園大学学園論集，127：15-42
発行日	2006-03-25

「教職インターンシップ」実践報告

—— 北海学園大学教職課程の2年間の試み ——

前 田 輪 音

1. はじめに

本論文の課題は、本学教職課程で行っている「教職インターンシップ」の実践報告とその意義の分析を行うことにある。

「教職インターンシップ」とは、2004年度より北海学園大学教職課程が近隣の北海学園札幌高校と連携して、大学4年（3年）生の希望者を対象に、その高校の夏季・冬季休業の学力補充講習においてチューターをつとめるという研修を指す。

教員養成課程では、大学で履修する講義（理論）とは別に、実際に教育現場で教師の仕事に接し行う（実践）機会が設けられている。従来教育実習がこの役割を果たしてきたが、近年それに加え、「スクールボランティア」や「学校インターンシップ」等の名の下に、あるいは本実習以外の学年に教育実習を設定するなど、様々な実践やその調査研究¹⁾が蓄積されてきている。

学校現場での研修はたしかに有益であるが、実施時期と内容、そしてどのような効果があるのか、などの検討は必要である。そこで、「教職インターンシップ」の実施方法を整理し、参加学生のアンケート調査をもとに、その意義を明確にする。また、それらを通して教育現場に接するあり方を考えていきたい。

2. 実施方法の模索

学生に学外の実験現場と接する機会を提供する場合、当然のことながら実施先の学校の確保と大学カリキュラムとの調整が必要となる。教員養成大学・学部であれば付属学校を有している場合が多く、比較的实施校の確保がしやすいが、本学の場合、条件は異なる。

しかし、近隣の北海学園札幌高校（私立）から北海学園大学教職課程履修生の派遣ができないかとの打診があり、2003年度より、その学校長をはじめ担当教諭と、本学教職課程担当者の間で数回の協議²⁾がなされた末、高校の要請に沿う形で実施時期・形式の骨子が決まった。それは高校の夏季・冬季休業開始直後（7月下旬・12月下旬）に行われる「学力補充講習」に学生をチューターとして送り込む、というものである。チューターの具体的指導内容・方法は高校側で教科ごとに設定することになった。大学としては、参加学生を募集し、高校に送り出すまでの必要な準

備(ガイダンスなど)を検討することになった。

2-1 参加対象学年の検討——北海学園大学における教職課程の現状

実施時期は高校の夏季・冬季休業開始直後ゆえ、本学のカリキュラムや行事日程とのかねあい、そして他大学の実践を参考にしながら、参加対象学年やその他ガイダンスなどを決めることになった。

北海学園大学は全学で経済・経営・法学・人文・工学部の計5学部11学科を有し、昼間部(「I部」9時～17時30分5コマ)と、夜間部(「II部」17時50分～21時2コマ)に分かれている。中学・高校の国語、英語、数学、社会、地歴、公民、商業、情報、工業、の各免許を取得可能である。教員養成専門の学部学科は設置されていないので、教員免許状を取得するためには学部卒業単位(専門科目)以外に「教職課程」を履修することになる。さらに、履修の便宜上、教職課程科目(「教職に関する科目」等)はI・II部両方で同時開講され、I・II部生がいずれの時間帯でも履修可能としている。たとえば、I部法学部生の場合、I部時間帯に法学部専門科目、I部の空き時間とII部の時間帯で教職課程科目を履修する。よって大半の教職課程科目でI・II部生が同席している。

「教職に関する科目」は1年次より順次履修可能であり、2年次以降、教科教育法および教育実習実践指導³⁾を履修できるようにしている。さらに、2年次以降には、中学校教員免許取得希望者は随時介護等体験実習を、4年次には2～3週間の教育実習を行う。つまり、授業開講期間は時間割上、時間的に決して余裕があるとは言えない学生生活を送る。

大学の年間行事日程では、教職インターンシップを開始する2004年度より、大学第1学期定期試験が夏季休業前に配置され、7月下旬から8月上旬まで大半の学生が大学に通学する必要がでることになった。

よって「教職インターンシップ」では、まずは4年生を中心に参加対象とすることにした。理由は、4年生であれば、教職課程の科目を含めてある程度単位を取得しているので相当の知見を有している。さらに、4年生での教育実習履修者の多くが第1学期に実習を終えており、教科指導を含めた教師の仕事をひととおり見学・参加・実践している。加えて、夏季休業前に大学の定期試験が実施されることから、夏季「教職インターンシップ」と時期的に重なり、必然的に定期試験科目が少ない4年次生に限定せざるを得なかったことによる。

2-2 先行研究の検討とそこから得た実施方法——事前ガイダンスと内容について

2-2-1 私立大学の実践

全国私立大学教職課程研究連絡協議会第24回研究大会では、スクールボランティアについて2つの分科会が設定された。そのうちの1つで報告された、東北学院大学「ボランティア学生による小学校英語活動」(村野井仁報告)⁴⁾は、市の教育委員会と連携して小学校に学生を派遣している

取り組みだが、参加した学生の意見として担任教師との事前打ち合わせの必要性が示されていた。このことから、筆者は、学生のニーズを適切に反映するためにも、実施校の状況を事前に学生が知る事が重要であり、教員と学生が事前に打ち合わせをする機会を設ける必要性を認識した。

また、この報告を含めた分科会の討論では、スクールボランティア運営についていくつかの課題が指摘された。交通費支給、保険（事故への対応）、現場でどこまで学生が「かかわっていいのか」、大学の役割—市教委との橋渡し役のみならず本来は大学と学校の連携が強化されるべき、などであった。特に交通費支給の問題は、複数回ボランティア校に赴く場合は学生の自己負担が重くなるので前向きに検討する課題のひとつであろう。また、実施校と大学の連携の強化は、実施校と学生の両者の課題を反映・関連させるためにはぜひとも必要である。「どこまでかかわっていいのか」とは、子どもや教師との接し方・かかわり方の模索であるが、同時に派遣先での研修内容を明確にする必要性を示唆するものであった。

2-2-2 教員養成大学・学部の実践

教員養成大学・学部⁵⁾の実践は、先に述べたようにカリキュラム上からみても本学とは条件が異なり、全面的に参考にすることは事実上不可能である。よって、2004年度からの実施前の検討対象ではないが、今後の実施方法の発展のためにもいくつかふれておきたい。

たとえば、岡山大学教育学部では、教育委員会と連携し公立学校において4年生向けに「学校教員インターンシップ」が実施されている⁶⁾。岡山大学では3年生で教育実習を履修し、さらに4年生で「応用実習」（1週間）を行い、その後に「養成と採用の連携」をはかるために設定されている。参加学年は本学のものと重なるが、内容は教科指導のみならず多岐にわたっている。実施後の学生に対する調査報告は含まれておらず、残念ながら学生にとっての実際の意義は不明であるが、運営方法で興味深い点がある。それは、「学校教員インターンシップ」のあり方を考える協議会に、教育委員会と拠点校代表および大学担当委員のみならず学生の代表も参加している点である。本学は各期実施後のアンケート調査により学生の要望を知り次の期の運営に役立ててはいるが、将来的には学生の声を直接に実施校に伝える組織も考えるうえで、参考にできる。

一方、新潟大学教育学部⁷⁾では、付属学校での1年次教育実習「入門教育実習」が実施され、学生のレポートをもとにした分析から、教員養成に資する実習となっていることがわかる。また、北海道教育大学釧路校では1年次より「ボランティア実践」が行われ⁸⁾、2006年度からは、そのために金曜日の講義を行わず、学外での「ボランティア実践」の時間を確保することになった。学外での研修に際して大学カリキュラムを全学的に調整した貴重な例である⁹⁾。

本学の場合、教員養成学部を有していないことから、1年次から教職課程を履修可能とはいえまだ教員に必要な知識と心構えに乏しく、定期試験との関係からみても困難と考え、教育実習履修学年の4年生やそれに近い学年の参加が妥当ではないかと考える。

2-2-3 北海学園大学「教職インターンシップ」の実施内容・方法（概要）の特徴

実施方法の骨子が確定した次の段階として、事前ガイダンスを含めた詳細な実施方法の確定作業に入った。大学側では執筆者前田が、高校側ではインターンシップ担当の教務部長大西修夫教諭と田中秀幸教諭が主に協議にあたった。執筆者は、先に述べた先行研究報告等で得た実施方法の検討に基づき、「教職インターンシップ」開始前の準備として、事前に大学実施ガイダンス、高校教科担当教諭と参加学生の打ち合わせの設定、さらには高校の普段の授業見学の必要性も指摘し、これら事前ガイダンスの実施を高校側に提案した。高校側では担当教諭らによる会議を経て、この方法を承諾、実施高校学力補充講習担当教諭全員の全面的な協力を得ることができた。

さらに、高校学校長名で本学学長あてに学生派遣の要請文書を作成・送付していただいたことにより、「教職インターンシップ」を大学の学業の一環として位置づけることができた。それにより、学生自身の保険の問題は解消した。加えて教育実習と介護等体験を履修する年度には、学校や施設利用者に何らかの被害を及ぼした際に適用される保険に加入することになっており、加入した学生は、万が一インターンシップ中に高校生に誤って怪我をさせるようなことがあってもその保険が適用される。

また、近隣の高校であるゆえに懸念された交通費の問題も解決した。

このような経緯を経て、2004年度夏季より「教職インターンシップ」開始することになった。詳しい実施内容は後述することとし、ここでまず実施方法の特徴を整理しておく。

第一に、運営主体が実施高校と本学教職課程であることにより、両者のニーズが実現されやすいこと。実施内容・方法はダイレクトに両校の合意のもとに決定でき、両者のニーズにあう運営が容易となる。仲介者が入り複数の実施校に派遣する場合、参加者を募り、どこにいつだれを派遣するかを誰かが采配せねばならず、学生も大学の時間割等と照らし合わせながら参加可能な時間や学校を割り出すこととなり、参加者も組織する側もかなりの労力を要する。「教職インターンシップ」の場合、実施校は1校で期間も限られているので、参加者を募集し参加的確かどうかを判断し、希望教科や連絡先を含めた名簿を作成、必要なガイダンスをアナウンス・設定し実施する、という仕事をすすめればよい。加えて、近隣の学校ゆえ交通費がかからないことも学生にとって経済的負担が少なくてすむ¹⁰⁾。

第二に、その方法・内容が「教えること」に特化したものであること。つまり、やることが明確であるということである。他の事例では、派遣学校での業務が教科指導・部活動・掃除の補助など多様なものもあり、「どこまでかかわっていいのかわからない」という不安感もある。一方、「教職インターンシップ」では、教師の最も重要な仕事である「教えること」とそれにかかわる生徒とのコミュニケーションに全力を注ぐことになる。

3. 実施内容

3-1 「教職インターンシップ」実施内容・方法の詳細

次に、「教職インターンシップ」の詳細について整理する。

実施校：北海学園札幌高校

実施内容：高校の「学力補充講習」のチューターを担当する。あわせて、夏季のみ高校1年生サマーキャンプ1泊2日の補助（英語科と他希望者が参加）

実施形態・内容：教科や学年ごとに異なる。

2005年冬季を例に、形態・使用教材を簡単に示す。「定期試験」とは、後期中間考査（11月下旬実施）をさす。

1年英語：チューター1名に受講生4～5名・高校作成プリント（文法）

2年英語：チューター1名に受講生4名・高校作成プリント（中学英語の文法）

1年国語：チューター1名に受講生6名・高校作成プリント（古典・漢文の基礎）

1年数学：1名（2日目までは高校教諭，3日目以降はチューターが交替で担当）で34名の受講生に一斉授業（他チューターはTT）・高校作成プリント（定期試験範囲の三角比）

2年数学：1名（2日目までは高校教諭，3日目以降はチューターが交替で担当）で20名の受講生に一斉授業（他チューターはTT）・高校作成プリント（定期試験範囲の数列）

2年日本史：チューター1名に受講生3～4名・高校作成プリント（定期試験範囲）

2年地理：チューター1名で受講生8名に一斉授業（他チューターはTT）・高校作成プリント（第3学期予習）他教科書と地図帳利用

第4期の時間割は表1の通りである。

表1 〈学力補充講習時間割〉

	23日	24日	25日	26日	27日
	開校式				
13:00～13:50	1年 国語 2年 地・日	1年 数学 2年 英語	1年 英語 2年 数学	1年 国語 2年 地・日	1年 数学 2年 英語
14:00～14:50	1年 数学 2年 英語	1年 英語 2年 数学	1年 国語 2年 地・日	1年 数学 2年 英語	1年 英語 2年 数学
15:00～15:50	1年 英語 2年 数学	1年 国語 2年 地・日	1年 数学 2年 英語	1年 英語 2年 数学	1年 国語 2年 地・日
					閉校式・反省会

実施時期：高校夏季・冬季休業開始直後（7月下旬・12月下旬）

2004年度夏季から開始し，2004年度冬季，2005年度夏季，2005年度冬季と現時点ですでに計4期の蓄積がある。

以下便宜上、実施順ごとに、2004年度夏季を第1期、第2期は2004年度冬季、第3期は2005年度夏季、第4期は2005年度冬季をあらわすこととする。

参加学生：

第1～3期：4年生・大学院生・科目等履修生

第4期：3年生・4年生・科目等履修生

各種事前ガイダンスの目的・内容：

先の検討・協議のうえ事前ガイダンスを設定した。目的・内容をあわせて記す。

0) 全体ガイダンス

年度始め(4月中旬)に、大学・高校担当者により、年度内参加希望者に「教職インターンシップ」の概要や実施時期を知らせる

1) 大学直前ガイダンス

大学作成ガイダンス資料(執筆者作成)を配布のうえ、全体にわたる注意事項・心構え、およびこの後に続く各種ガイダンス(高校教科担当教諭との打ち合わせ、授業見学、本番)の日程・目的・注意事項を知らせる。

大学直前ガイダンス資料(第4期用)のうち、「参加にあたっての心得・持ち物・服装など」を抜粋する。

〈参加にあたっての心得・持ち物・服装など〉

- ・補充講習本番はもとより、打ち合わせ・授業見学时より、教師としての自覚をもち、ふさわしい言動と服装(スーツあるいはそれに準ずる服装)を心掛けてください(3年生は内諾書類持参時を、4年生は教育実習時を想定せよ)。
- ・それぞれにおいて、時間は厳守し、10分前集合を心がけてください。
- ・派遣先の高校は進学校を目指していますが、学力補充講習の受講者は、勉強が好きな生徒ばかりとは限りません。そのような生徒に、基礎・基本を中心に勉強の楽しさ・面白さを理解してもらうよう、つとめる機会となります。みなさんの腕の見せ所です。
- ・上靴は持参してください(打ち合わせ時・授業見学の時から)。
- ・チューター終了後も、今回受け持った生徒と再会することもあるでしょう。その際は、教師としてうけこたえができるようにしましょう。
- ・高校のことを、事前に配布した資料のほか、HP(充実しています)など活用して、よく調べておきましょう。

2) 高校教科担当教諭との打ち合わせ

高校において、講習の使用教材や定期試験問題を配布し、受講生徒がどのくらいの学力レベルなのか、教科ごとの実施形態・内容を知らせる

3) 高校授業見学

高校において普段の授業を見学することにより、担当するであろう生徒たちがどのようにふだん勉強をしているのかその様子を事前に知る。

4) 本番

①開校式（初日開始時）

諸注意事項、高校学校長・担当教諭および大学担当者挨拶

大学より日誌・アンケート配布

②インターンシップ開始（5日間）

③反省会・閉校式（最終日）

高校学校長・担当教諭および大学担当者挨拶、全員で感想を述べ合う

3-2 実施方法の変遷

実施方法一計4期にわたる大まかな変遷：

以下に、実施日程・参加資格・補充講習受講生学年・大学直前ガイダンスの資料の内容と量、その他、特徴などの変遷を表2に示す。

4. 「教職インターンシップ」の意義

参加学生に実施したアンケート調査等をもとに分析していく。

4-1 分析方法

4-1-1 分析内容・項目

アンケートは主に自由記述と若干の選択形式により構成されている。実施を重ねるごとに内容の見直しを行ってきているので、下記にその変遷を示す。

第1期：参加動機、ガイダンスのあり方について、参加感想、大学・実施校への要望、後輩へのアドバイス

第2期：上記に加え、1期の記述に多くみられた「教育実習との関連」を問うものを設定

第3期：上記に加え、実施後の達成度、および教員養成段階に学生として必要と考える研修内容について問う項目を設定

なお、この時期のみ、高校担当教諭へのアンケートを試行的に実施

第4期：上記に加え、3年次生の参加を考慮し、次年度も参加したいと思うか、小学校や中学校での「スクールボランティア」¹¹⁾を開始するとすれば参加したいかどうか、参加者自身が考える本インターンシップ実施に適切な時期（教育実習の前か後）はいつか、を問う項目を設定

最新の第4期アンケート内容は以下の通りである。

表2 <4期間の実施方法概要>

	第1期	第2期	第3期	第4期
講習日程	2004年7月26～30日	2004年12月23～27日	2005年7月26～30日	2005年12月23～27日
参加学生(大学)	4年・科目生	4年・科目生	4年・科目生	3 ^(※1) ・4生・科目生
受講生(高校)	1年生	1年生	1年生	1・2年生
大学ガイダンス日程	6月28・29日	11月24～27日 ^(※2)	6月27日～7月4日	12月1～7日
教科打ち合わせ日程	7月2・6日	12月10・13日	7月2・4日	12月15・17日
高校授業見学日程	教科打ち合わせにてアナウンス	12月13・14・15日	7月11・12日	12月15・16日
大学直前ガイダンス資料の内容	各事前ガイダンス・サマーキャンプ・講習の日程・内容、参加者名簿	全体の注意事項として「インターンシップ参加にあたっての注意点」を付加、学力補充講習が少人数形式であることを解説、各事前ガイダンスの目的・日程・内容・注意事項、授業見学と講習の時間割を貼付、高校発行紙抜粋を掲載—第1期実施の様子記事貼付、参加者名簿	第2期(左記)と同様	第2期の内容に加え、第1・2期継続参加者7名による「後輩へのアドバイス」(実施後のアンケート調査回答)
資料の量	B5版用紙1ページ	B5版用紙3ページ	B5版用紙3ページ	B5版用紙4ページ
その他		大学直前ガイダンス実施時期を早める(第1期アンケート回答にて要請あり)		事前に、10月実施の「教職準備研修会」で体験談を聞く ^(※3)

表中の表記補足…「大学ガイダンス」とは「大学直前ガイダンス」を、「教科打ち合わせ」とは「高校教科担当教諭との打ち合わせ」、「科目生」とは「科目等履修生」をそれぞれ指す。

(※1) 3年生の参加条件は、各教科教育法4単位および教育実習実践指導1単位以上を取得していることとした。ただし条件を若干満たさぬ学生も、面談のうえ意欲があれば参加を許可した。

(※2) 大学直前ガイダンスは、第1期当初は執筆者前田が一人で担当していたが、第2期以降、複数の教員により様々な時間帯に設定した。執筆者前田のほか、教職課程専任教員の松田光一、武部良平、黒田稔が担当している。

(※3) 本学では、教職に就くことを強く希望する3年生を対象に、毎年秋に「教職準備研修会」(1泊2日自由参加)を行っている。2005年度は、第1・3期教職インターンシップ参加者数名に教育実習・採用試験体験談とともに、教職インターンシップについても広く3年生の知るところとなった。

①参加動機、②参加感想、③教育実習と異なる点、④教育実習との時期的関係性(教育実習実施後参加者のみ)、⑤後輩へのアドバイス、⑥大学・高校への要望、⑦ガイダンスのあり方について(各種ガイダンスごとに)、⑧達成度、⑨教育実習実施後も参加を希望するか、⑩スクールボランティア参加希望の有無、である。

①参加動機からは学生が期待する内容や自らの課題を、②参加感想や③教育実習と異なる点および⑧達成度からは、参加者にとっての意義を読み取ることができる。また、④教育実習との時

期的関係性については実施時期の検討材料となる。⑨⑩は、参加が次なる諸研修への意欲を喚起しているかどうかを知る事ができる。よってこれらの設問への回答を分析対象とする。

なお、⑦ガイダンスのあり方や⑥大学・高校への要望での回答内容は、出来る限り次の実施時期の運営に参考にしている。また⑤後輩へのアドバイスからは多くのことが読み取れるが、あくまで「後輩」へ述べられているものであるので対象外とする。

分析に際しては、「教職インターンシップ」の適切な実施時期を図るため各分析項目において適宜、教育実習実施前と教育実習実施後の参加者の比較を行う。

ここで、教育実習実施前後の比較の必要性は、原清治・芦原典子（佛教大学）のスクールボランティアに関する調査研究から得た¹²⁾ことを断っておく。教育実習前に参加した学生は「教育実習の不安は、スクールボランティアをすることで、逆に不安は増幅されていることが明らかとなった」とされ「スクールボランティアでできなかったこと、すなわち『授業をする』という点においては、期待を抱く一方で、不安が大きくなっている点も指摘することができる¹³⁾」とある。ただし、この「不安」は教職への意欲を減退させるものでは必ずしもないことは、2005年9月発表の場で指摘されている¹⁴⁾。

以下に、分析項目を列挙する。

分析項目：

- 1) 参加した動機
- 2) 参加した感想
- 3) 教育実習との比較および適切な実施時期
- 4) 個々人の「達成度」
- 5) 次回への参加意欲
- 6) 希望する研修・他の研修への参加希望・内容

4-1-2 分析対象者 各期参加者人数・内訳

以下に、4期にわたる参加者（分析対象者）の人数および教科や学年、教育実習実施前・後の区分を示す。いずれの期も参加者のうち科目等履修生は教育実習履修済みである。また、4年次は教育実習履修年度ではあるが、編入学生であることや単位取得状況などの理由により、教育実習履修を次年度に繰り越すケースもある。

第1期：12名（教育実習実施後9名 教育実習実施直前2名 次年度実習予定1名）

教科別…国語3名 英語5名 世界史3名 数学1名

学年別…4年生：9名 科目等履修生：1名 大学院生：2名¹⁵⁾

第2期：14名（教育実習実施後13名 次年度実習予定1名）

教科別…国語5名 英語4名 世界史5名

学年別…4年生：11名 科目等履修生：3名

(第1期からの継続参加者は7名…4年生6名・科目等履修生1名)

第3期：11名¹⁶⁾ (教育実習実施後10名，教育実習実施直前1名)

教科別…国語2名 英語6名 世界史3名 数学1名

学年別…4年生：6名 科目等履修生：5名

第4期：20名 (教育実習実施後4名，次年度実習予定16名)

教科別…国語1名 英語6名 地歴科4名 数学9名

学年別…4年生：5名 (うち第3期からの継続参加1名)

3年生：13名 (次年度実習) 科目等履修生：2名 (1名は第1期参加者)

4-2 分析

以下に，各分析項目に続けてアンケート項目を枠で囲んで示し，続けて回答文や要約を示し，傾向を分析する。

学生の表記方法の一例として，“2期 英語 4年”は「第2期 (2004年度夏季) に英語担当で参加した4年生」を，“4期 日本史 科目”は「第4期 (2005年度冬季) に日本史担当で参加した科目等履修生」を指すものとする。

4-2-1 参加動機

第1・2期 「参加した動機」

第3・4期 「参加した動機・目的」

教育実習実施後の初参加者：

まず，一例を紹介する。

「自分の教育実習が中学校だったということもあり，高校で生徒に教える際，中学校とはどのような違った困難さが出てくるのかを自分で見て，あるいは感じて，これからに生かしたいと思い，このインターンシップに参加しようと考えた。また，自分が何かを教えるという体験を少しでも多くとり，自分の中で教えるために何が必要なのかを考え，実行するよい機会だと思い，参加した。このインターンシップで，生徒が“理解する”ことや“興味を持つ”ことへのきっかけをつかむことを，最大の目標として努力していく。」(3期 国語 4年)

このように，1人で複数の観点にふれているものが多い。その他としては，教育実習だけでは十分なので生徒と触れ合う機会をより多くもちたい，教育実習 (校) 以外の経験をもちたい (教育実習とは，他の学校・他の学校種・他の形式—補充講習・他の地域)，より多くの経験をもちたい，自分にとって刺激になる，生徒の考え方を知りたい，自分の力を試したい，教育実習以外の科目の授業を経験したい，インターンシップ実施高校の外国人を取り入れた取り組みに注目して，

実習を踏まえたより多くの経験を、教師への道を再確認したい、実習校とは他地域の生徒を知りたい、個別指導は力が試せる、実習で生かし得られなかったものを得る、生徒の理解・興味を深めたい、英語嫌いな生徒の苦手意識を克服させたい、生徒に歴史の面白さを感じさせ興味・関心をもたせる、などである。

教員としての力量、特に教育方法の模索の機会や生徒と接する経験を、教育実習後、なお切実に求めるものであり、教員を目指した積極的な理由である。

教育実習実施直前（第2学期に教育実習を予定）の初参加者：

「教育実習がまだ終わってないのですが、実習以外に学校という場で生徒と向き合える機会はなかなかないので、参加しました。」（1期 国語 4年）

「教育実習に役立つと思ったことと、実際の生徒と接する機会はそう多くないと思い参加しました。」（3期 世界史 科目）

教育実習実施後の学生と比較すると、教育実習の準備として意識して参加した傾向が強いが、多くの経験を積みたいという意志は教育実習実施後の学生と変わらない。一方で、教育方法の模索については触れられてはいない。

教育実習実施直前（第1期）と実施後（第2期）の比較：

第1期参加者のうち、4年生1名のみ教育実習が第2学期であったため、第1期参加→教育実習→第2期参加という経緯をたどった。その参加動機の変化をみる。

第1期：「将来教師となった時のために多くの経験をつんでおきたいと思ったため。また、現在の学生達がどのような物の見方、考え方をしているか興味があったため。」

第2期：「夏に参加した時に面白く感じ、またやりたいと考えていたため。また教育実習の前後で、自分に教える力がついてきたかを確認してみたいと思ったため。」

第2期の回答からは、第1期参加による意欲向上と、教育実習を経た自らの能力向上の確認が動機であることがわかる。

教育実習実施を次年度に控えた初参加者（第4期）：

一例をあげる。

「教育実習に行く前に、実際生徒に英語を教えたいと思い参加しました。私は中学校に行くので、一度高校生も教えてみたいと思っていたためいいチャンスだと思い参加しました。」（4期 英語 4年）

「教職を志す者として、教育実習だけにとどまることなく多くの実践が必要だと思い参加しました。また、教育実習とは異なり少人数での授業形態となるため、現在最も必要とされているコミュニケーション活動の大切さを実感したいとも思いました。よって、このインターンシップを通しての目的としては、5日間という短期間の中でも自分が受け持つ生徒との密なコミュニケーションを大切に、自分が持っている最大限の力を発揮したいと思います。」（4期 英語 3年）

「大学内で、教職の勉強や、模擬授業などを行ってはいしたが、授業のリアリティがかけていた。

特に、工学部は数学を得意とする学生が集まっており、その中で模擬授業を行っても、すんなりと進んでしまう。実際には、そのようにはいかない。そこで、生の現場を体験し、これからの勉強につなげたいと思い、このインターンシップに参加した。5日間という短い期間の中で、私が携わった生徒が、少しでも理解してもらえるように一生懸命がんばりたいと思う。」(4期 数学 3年)

「教育実習の前に、実際に学校へ行って教えるという経験はできないと思い、自分の勉強のためにも参加したいと思いました。勉強が苦手、嫌いな生徒に、どのように教えればわかりやすいのか、丁寧かつ、ポイントをおさえた指導の技術を身につけるため。」(4期 日本史 3年)

教育実習前の研修として意識している。しかしそれにとどまらず、教育方法能力やコミュニケーション能力の向上など、教員としての力を身につけたいという向上心があらわれている。また、教育実習実施後の学生と同様に、教育実習実施校とは異なる学校種での指導経験が積めることもあげられている。

よって、本インターンシップの存在意義は、単に教育実習の前段階にとどまらないことが、教育実習前の学生にとっても読み取れる。

教育実習実施後の第1・2期継続参加者の2回目の参加動機：

第2期の回答からは第1期参加経験を肯定的にとらえ、再度参加したい旨の記述が多くみられた。一例をあげる。

「私がこのインターンシップに参加した動機は、教員を志望し、教職課程を履修してきた一人として、実際に経験を積みたいということでした。教育実習では、多くのことを学んだ一方、失敗したこともあったので、その経験をふまえ、実践する中で、今の自分に欠けている点、注意すべき点を再確認する場として参加させて頂きました。夏季のインターンシップに参加していたので、夏季の反省点を冬季に生かすことを私自身の課題として今回参加しました。教育実習では、1クラス全体が対象だったのに対し、インターンシップは少ない生徒数で進めるということで、どのような点が異なり、特徴は何かを考えてみた、参加しました。」(2期 英語 4年)

全7名分を要約すると、第1期が楽しかった・有意義だった・得られたことが多かった・教諭のアドバイスがためになった、などである。なかでも、第1期の反省から得た課題を生かしたい、第1期で現場で学ぶことの有意義性を把握した、など、第1期で得られたもの・得られなかったものが次の第2期への参加の土台になっていることがわかる。これは1回目の参加がさらなる研修意欲をかきたてたことを意味する¹⁷⁾。

4-2-2 参加感想

第1～2期：「インターンシップに参加した感想」

第3～4期：「自分にとって良かった点、勉強になった点、困難をおぼえた点、など具体的に述べてください。」

アンケート文が若干変更されているので、実施期をわけて分析する。

第1～2期 教育実習実施後の参加者：参加回数ごとに、いくつか回答を示す。

初参加者：

「今回の内容が「補充講習」ということもあり、勉強を得意とは必ずしも言えない生徒を相手として教えなければならなかった事がどうも困難であり、出来ないにしてもどれほど出来ないのかが事前に私たちに十分に理解することができなかつたので不安でありました。しかし講習をはじめていくにつれ、どんどん前までできなかった事もおぼえてくれるようになり、彼らにとってもそして私にとっても良い励みになりました。結果としては、彼らが十分に理解したとは必ずしも言えないが、彼らの背中を押してやることはできたのではないかと思う。そして同時に、私も彼らのようにっている生徒がいるのだということを改めて知ることができた。」（1期 国語 4年）

「ペースの速い生徒とゆっくりな生徒がいる時、どのように授業を展開していけばよいのか困った。結局はゆっくりな生徒を引き上げようという意識ばかりが働いて、早い生徒にとっては退屈なものだったかも知れない。マンツーマンの授業と多人数での授業それぞれにメリットがあることを学んだ。前者は生徒に即応して集中的に学習できる。後者は生徒同士で教え合わせたり皆で解答を検討したりと一人では気付かないことを知る可能性がある。両者ともに教師側のしっかりとした授業運びが大事になることも確か。漢文を学び直す中で、自分自身再発見できたことがある。誤った知識を修整することができたのは自分にとって幸いなこと。」（2期 国語 4年）

継続（2回目）参加者：

継続参加者は7名であったが、教育方法についての感想が多かった。2つ例示する。

「夏と冬の2回、このインターンシップに参加できたことが良かったと思います。1回目の生徒は、にぎやかで反応も良い生徒達だったのに対して、2回目の生徒はあまり自分から話そうとする子が少なく、反応がなくかなり苦労しました。その中で、少しずつ、自分の授業に生徒を引き込んで集中して50分の授業を展開することができ自信ができました。」

高校の英語教育で一つの壁になる“関係詞”を教えた事で、自分もかなり勉強になりました。いかに簡単に説明するかをずっと考え、その中でいろいろな指導方法を研究して、得られるものが多かったです。」（2期 英語 4年）

「教師が提示した教材にすぐ興味をしめしてくれたり、反応がある場合、教師は授業を進め易く、なんの問題、困難もなく終えることができますが、その反対の場合、何らかの対処法が必要になっ

できます。いくつか多様な教材を事前に用意したり、もう少し話す内容を変えたり、わかりやすい説明方法を考えるなど、あらゆる視点から考え直す必要がでてきます。今回のインターンシップでは、どのようにしたら、少しでも生徒が興味深く話しを聞いてくれるか試行錯誤をしました。反応が返ってくると嬉しく、充実感を得ることができました。少しずつ前進することで成長していくことができ良かったです。」(2期 世界史 4年)

第1・2期の参加者の記載を要約すると、次のようになる。少人数相手の指導で個に応じたペースを調整する方法を模索したこと、少人数でも学力差が当然存在しその指導にあたっての調整の困難さに直面したこと、教材研究の重要性の再確認、指導方法の再考―歴史の指導方法の基本、生徒への接し方の模索、教科内容そのものが自分自身の勉強になったこと、他教科指導の経験ができた、生徒に興味・関心をもたせやる気をださせる方法を模索した、プリント作成の工夫をした、教育実習の失敗をバネに参加した、他のチューターや高校教員との指導方法の意見交換が参考になった、生徒を引き込む方法を模索し自信がついたこと、興味をもたせる方法の模索と自らの成長の自覚と喜び、適切な指導方法を模索する困難さの再確認、苦手意識の克服の困難さの認識、基礎基本の重要性と指導の困難さに気づいた、などが書き表されている。

第3, 4期: 第3, 4期のアンケート文の構成は、参加動機、達成度を考えさせた直後に参加感想(「良い点、困難をおぼえた点、」など具体的観点を明示して)を配置している。回答内容もアンケート設問文の観点到に沿って整理しているものが多かった。一例をあげる。

教育実習実施後の初参加者(第3期):

先述した第1・2期と大きな変化は見られないが、いくつか回答文を紹介する。

「少数の人数での授業を体験出来たことが良かった点です。反応がダイレクトにかえってくることで、私自身も刺激になりました。しかし、楽しく教科に興味を持てる授業を考える時、簡潔でわかりやすいだけの授業が必ずしも良いとは限らないということが勉強になり、今後その点を解消していくことが私にとって困難をおぼえる点です。」(3期 世界史 4年)

これは、少人数を相手にすることにより、生徒のつまづきの発見や、興味を持つ教育内容・方法のあり方をよく考える機会となったことがわかる。

「勉強になった点として、生徒が全くわからない状態で授業を始めるのではなく、何か生徒が知っている事を見つけだし、そこから授業を展開すると進行しやすいです(今回は、トロイやハンニバルなどが問題にでていたので映画と併せて説明をしました。)→生徒が知っていて、身近なものから入るとやりやすい」(3期 世界史 科目)

この参加者は、実際に指導しながら効果的な導入の内容・方法を獲得したことがわかる。

「難しいと感じたのは、わからないと言われた時どこまでフィードバックしたらわかるのかを瞬時に考えることでした。戻ったのはいいが、戻りすぎだったり、逆に足りなかったりと、生徒のニーズに応じて応用していくことが難しかったように思います。復習のプリントを作り、毎回時間のはじめに行ったのは良かったのではないかと思います。」(3期 国語 4年)

生徒の理解の段階を瞬時に知ることとそれを反映させた指導方法が必要であることを、短期間に発見したことを示す。復習プリントを作成し導入に使う工夫がみられる。

教育実習実施前の初参加者（第4期）：

「自分にとって良かった点は、実際に生徒達に教えることによって、例えば生徒を集中させるにはどうしたら良いか、どのようにすれば生徒はこの単元を理解してくれるのか、どこまで理解させるのかというような様々な課題を得ることができたことです。これはそのまま困難をおぼえた点につながるのですが、これらを解決しようと日々試行錯誤したことは今後にとっても有益なことだと思いました。勉強になった点は、生徒をしっかりしかることの大切さを学んだことと、マーカーでラインを引かせるなどの作業で生徒を集中させる工夫です。」（4期 英語 3年）

「良かった点、勉強になった点は、担当教諭やチューターの指導をみて、自分では思いつかなかったわかりやすく適切な指導や、見やすい板書の書き方を学べた。困難をおぼえた点は、自分がかみくだいて教えているつもりでも、生徒がしっかりできていなかった点や、授業を行ったときにペース配分を考えていなかったために20分程度の説明に30分もかかってしまったことが反省点となった。今後は改善点に注目し、わかりやすく適切な授業や指導を行っていけるよう、模擬授業等を行っていきたい。」（4期 数学 3年）

「授業を実際にやってみないと、自分がどれほど理解しているのか本当にわからないので、自分の弱点が発見できました。それが今後の課題となったので、そこがプラスの点です。自分の授業を高校の先生が聞いていて、良かった点や改善点を指摘してくれるので、とても勉強になりました。困難をおぼえた点としては、生徒が実際予想外の質問をしてることがあったので、その対応に若干戸惑いました。」（4期 日本史 3年）

「実際に高校生を前にして授業をするという実践的な体験を教育実習の前にすることができたことは自分にとって最も良かった点だと思う。他の教科の講習も見てみたかったが、余裕はあまりなく、今回は見るができなかった。しかし、控え室で他教科のチューターといろいろな話をするので、自分にとって良い刺激になった。授業については、時間配分がなかなかうまくいかず、次の授業の人たちに迷惑をかけてしまった。授業を展開していくなかで、適切な指示（質問）が出せなかったり、生徒に理解させるためにわかりやすくかみくだいて説明をするというのがなかなかうまくできなかった」（4期 地理 3年）

教育実習前（翌年に控えている）とはいえ、いずれも教育内容や方法について、教諭や他のチューターから学び取ったり、自身で指導し試行錯誤し、反省的にふりかえっている様子が具体的に表されている。大学の講義において模擬授業を重ねている学生も多いが、第4期は、教育実習を履修していない学生が多かったので、高校担当教諭がよく指導して下さったことが学生にとって大変有益な機会となったこともわかる。あたかも、教育実日誌の授業実習を記録する箇所であるかのような記述内容である。

実施校の担当教諭によると¹⁸⁾、教育実習実施後の学生と比較して、2日目くらいまでは緊張や経

験不足などからか固さが目立っていたが、3日目以降最終日5日目まで、いろいろな工夫を活発に行っていたとのことである。その「3日目」以降発揮された力を如何にして初日から出せるようにするかは今後の大学としての課題であるが、教育実習実施後の学生と比較して、決して劣っているとはいえない感想である。

4-2-3 教育実習との比較

第1期はこの点について特に注目せずにアンケート項目を作成したが、「参加感想」には教育実習との関連を記載しているものがみられたので、第2期以降、アンケート項目に教育実習との比較に関する項目を設け、教育実習実施後の学生に回答を求めた。

第2期 教育実習と大きく異なると感じた点

第3期 教育実習と比較して、大きく異なると感じた点、教育実習とは異なった経験・成果、などがあれば、書いてください。

第4期 教育実習をすでに履修した人にお尋ねします。

(1) 教育実習と比較して、大きく異なると感じた点(内容・苦労・成果等)があれば、書いてください。

第1・2期：学生の多くが、教育実習が大人数対象の一斉授業形式であるのに対し、「教職インターンシップ」は少人数指導できめ細かい・柔軟な指導ができる、質問が多くより綿密な教材研究が求められる、興味・関心をもたせることによりいっそうの工夫が必要である、教育実習校とは別の学校を経験できてよかったこと、などを指摘していた。

第3・4期：第3期以降、さらに設問内容を具体的にしたので、いくつかの回答を示す。

教育実習実施後の4年生：

「やはり、少人数に教えるということで、反応がより分かりやすく返ってくる点が一番異なったと思います。実習では、集団の中ではどうしても個人の主張が目立たなかった為、自分の教え方に対する生徒の感じ方を知るのに最適だと思いました」(3期 国語 4年)

「内容でいえば、生徒の理解度が手にとるようにわかるので、やりやすいと思いました。3名が相手であったので、その3名の好みなどを聞き、それに合わせた話をしてゆけば、食いついてくれるので、教育実習よりかなりやりやすかったです」(4期 日本史 4年)

「教育実習と一番異なると感じたのは生徒の質の違いです。学校が異なることで、そこにいる高校生の質も大きく異なってくるのだと感じました。また、教育実習では1クラス40人強を相手に授業を行って、名前を覚えるだけで精一杯という部分がありましたが、今回は少人数ということで、一人一人の表情というものを意識しながら授業を行うことができました。」(3期 世界史 4年)

「教育実習とは違い、少ない人数を対象に教えるので、より細かな対応をしなければならなかったことが挙げられる。また、自分は中学校で実習を行ったので、中学生と高校生の違いを見ることができたこと、例えば、授業における態度の違いが見られたことなどがあり、良い経験だったと思う」（3期 国語 4年）

これらは、第1・2期と同様、教育実習と異なる学校種や生徒の質が異なるなかでの指導経験がもてたことの良さが指摘されている。また、少人数ゆえ、個に応じた対応が必要だったことと、個別の反応がよくみられたことも述べられている。特に最初の三者は、教育実習中に大人数の授業実習を行い、それをふまえたうえで、「教職インターンシップ」で少人数指導の利点、いわば醍醐味を味わったものといえる。余裕さえ感じる貫禄ある感想である。

さらに、実施内容の比較のみならず第4期では、上記(1)に加えて、教育実習とてらして「教職インターンシップ」の実施有効時期を尋ねた。

第4期 教育実習をすでに履修した人にお尋ねします。

(2) 実習前と後のどちらの時期にこのインターンシップを行うのが自分にとって有益か、あなたの考えを聞かせてください。

時期（選択性）：実習前 実習後 実習前と後の両方（いずれかに○を） 理由：

第4期参加者のうち、回答対象者は4名である。

選択結果は、「実習前」選択者が2名、「実習前と後の両方」選択者が2名、と意見が分かれた。以下に、その理由をあげる。

「実習前と後の両方」選択理由：

「実習前には実際に生徒に教える機会のごくまれであるし、実習後には学校によってあるいは生徒によって教える方法を少し帰る必要があるとわかると思うので。」（3・4期 英語 4年）

「私は実習後の2回に参加しただけなので“実習前”についてはわからないが、おそらくいずれにしても、得るところは大きいと思う。実際に学校現場に与る貴重な機会の1つであると思う。結局は、参加するチューターの目的意識ひとつで、プラスにもマイナスにもなると思うが。」（1・4期 数学 科目）

「実習前」選択理由：

「一番有益だと思える点は、実際の現場に行くことによって、生徒達の状況（生活面・学力面など）を把握できるということだと思った。また、生徒達との関わり方や教材研究といった点においても力をつけることができるので、有益であると思います」（4期 数学 科目）

「やはり難易度でいえば、教育実習の方がむずかしいと思うので、先にインターンをして、ムードになれておいた方がよいと思います。」（4期 日本史 4年）

特徴的なのは、複数回この「教職インターンシップ」に参加している2名（4年生および科目

等履修生)は教育実習前と後の両方で行うことを適切と回答し、第4期すなわち1回のみの参加者2名(4年生および科目等履修生)が教育実習前を選択している。これは複数回参加するうちに、「教職インターンシップ」の意義の多様さを理解したゆえと考えられる。

4-2-4 個々人の「達成度」(第3・4期)

第3・4期では、アンケートに、「参加した動機・目的」と、インターンシップ後に振り返ってその目的は達成されたかどうかを問う項目を下記のように設けた。

〈参加した動機・目的〉を振り返り、このインターン・シップであなたの目的は達成されましたか。

(A) おおいに達成された (B) 達成された (C) どちらとも言えない

(D) 達成できなかった (E) まったく達成しなかった

上記のように考えた理由を率直に述べてください。

選択結果と内訳を以下に記す。

第3期(11名中)：

A…2名(教育実習実施後) B…7名(教育実習実施後6名、教育実習実施直前1名)

D…2名(教育実習実施後)

第4期(20名中)：

A…6名(全員次年度教育実習)

B…10名(教育実習実施後3名、次年度教育実習7名)

C…4名(教育実習実施後1名=第3期からの継続参加、次年度教育実習3名)

次に、選択理由を「参加動機・目的」とともにいくつか示し分析する。

1) A「おおいに達成された」の選択者：

Aを選択した学生は第3期と比較して第4期参加者の方が多い。第4期のA選択者は全員が教育実習実施前の学生である。

教育実習実施後：3期 英語 4年

動機・目的：「まず初めに、「教える」という経験をできるだけ多くしたかったからである。またこのインターンシップは英語が苦手な生徒ばかりだということで、少しでもこの補充講習で理解できるようになったり楽しく学んでもらえればいいなと思ったからである。」

理由：「たった五日間だったが、日数をかさねていく度に、少しずつ質問が増え、その質問に答えていったので、理解できたのではないかと思う。」

目的は経験と受講生の理解・興味の促進にあるが、受講生からの質問が増えたことから興味の促進をはかれたと自己評価している。

教育実習実施前：4期 地理 3年

動機・目的：「人間としての力を身につける為です。また，来年の教育実習の1つのステップとして参加したいと思いました。インターンシップに参加して，生徒の前で発言することの経験，実際の生徒との触れ合い，授業の組み立て方を経験したくて参加しました。インターンシップで，1つ上のランクの教師になれるように努力し，結果として，いろいろな経験をしようと思っています。」

理由：「失敗ばかりでしたが，それが自分のダメなところや，良いところを発見するきっかけとなって，目標は達成できたと思います。」

自己の課題の発見による満足感から，「失敗ばかり」だったが，目的は「おおいに達成された」が選択されている。

教育実習実施前：4期 数学 3年

動機・目的：「大学の講義や模擬授業では，実際に生徒と交流する機会がないので，教育実習の前に，実際の現場の雰囲気を体験しておきたいと思い，参加しました。」

理由：「実際に生徒と会話をすることで，何がわからないのか，どこでつまづいているのかを見出すことができた。」

現場の体験が目的だったが，生徒との会話から生徒のつまづき箇所の発見という当初の目的以上のものを得た事が，選択理由といえる。

2) B「達成された」の選択者：

教育実習実施後：4期 日本史 4年

動機・目的：「本年5月の教育実習の経験を生かし，現場での経験を積むことを目的とします。実習時はクラス単位での授業であったが，今回は少人数制ということで，また異なったスタイルの経験になると思います。本来，政経が専門ですが，日本史を楽しくわかりやすく教えられるよう努めたいと思います。」

理由：「まず自分自身が日本史をもう一度勉強したことと，生徒さんと近い距離で授業ができたため。」

専門外の教科の指導と少人数指導の2つの経験を目的としていたが，ともに達成されたことを受けての評価である。

教育実習実施前：4期 英語 3年

動機・目的：「来年の5月中旬に高校へ教育実習に行く前に，英語を高校生に教えたいと思ったことと，そして自分なりにどういうふうに授業を行ったり，英語の文法を説明したらいいのか，自分が授業の中で工夫できることを考える機会が欲しかったので参加しました。目的は，今回この英語の補習に出ている生徒は英語を苦手としていたので，少しでも英語が苦手，嫌い，つまらない教科という気持ちをなくして，英語という教科もやればできるということを分かってもらおうことです。」

理由：「プリントなどを毎日作成するのはとても大変でしたが、プリントやフラッシュカード、ゲームを通しての英文法の説明は生徒にとって理解しやすく、英語自体にも興味をもってくれた。」

英語が苦手な生徒への様々な教育方法の工夫を実施でき、興味を持ってもらえたことの自己評価である。

3) C「どちらとも言えない」の選択者：

教育実習実施後：4期（3期も参加）英語 4年

動機・目的：「教育実習とはまた違う少人数制の授業を経験することによって生徒への気配りや生徒それぞれのつまづきやすい部分に気づきやすいことなど、個別指導において大切なことを経験できるので参加しました。また、実際に授業をすることが貴重な体験であるので、少しでも多く経験したいと思い、参加しました。このインターンシップにおいて生徒それぞれをできるだけ見極め、個々に対応できるよう努力したい。」

理由：「理解しているか反応を読みとることができたが、説明の仕方を変えたりすることなどがあまりできなかったため。」

教育実習実施後でしかも第3期からの継続参加者であるこの学生は、より慎重な自己評価を行っている。継続参加によりさらに高次の目標と自己課題を認識したうえでの評価といえる。

教育実習実施前：4期 英語 3年

動機・目的：「少しでも多く学校で生徒とふれ合う機会を持ちたかったのと、教科指導力をつけたかったからです。また他の人の授業も見ることがあればと思って参加させていただきました。」

理由：「楽しく授業をすることができたのですが、授業としてのけじめをきちんとつけることができなかった。」

生徒とふれあい「楽しく授業をする」ことはできたものの、一方で自らの指導に際しての姿勢の問題を反省しての自己評価である。

教育実習実施前：4期 数学 3年

動機・目的：「大学内で、教職の勉強や、模擬授業などを行ってはいしたが、授業のリアリティがかけていた。特に、工学部は数学を得意とする学生が集まっており、その中で模擬授業を行っても、すんなりと進んでしまう。実際には、そのようにはいかない。そこで、生の現場を体験し、これからの勉強につなげたいと思い、このインターンシップに参加した。5日間という短い期間の中で、私が携わった生徒が、少しでも理解してもらえるように一生懸命がんばりたいと思う。」

理由：「生の現場を体験でき、自分の中でより教師のイメージはつかめたと思う。しかし、私が消極的だったゆえに、生徒に教える機会が少なかった。」

数学科は第4期ではじめて多数のインターンシップ参加者を得た為、期間中の大半はTTとして、多くても1回の授業を行うのみであった。そのため、他の教科の学生よりも、生徒との接触は積極的に行わない限り機会は少なくなる。そのような実施形態に起因する評価であるが、「イ

メージはつかめた」ようである。

教育実習実施前：4期 日本史 3年

動機・目的：「教育実習の前に、実際に学校へ行って教えるという経験はできないと思い、自分の勉強のためにも参加したいと思いました。勉強が苦手、嫌いな生徒に、どのように教えればわかりやすいのか、丁寧かつ、ポイントをおさえた指導の技術を身につけるため。」

理由：「とても勉強にはなりました。しかし、丁寧かつポイントをおさえた指導は想像以上に難しく、まだまだその技術は身につけていないと感じたからです。」

目的のうち、「ポイントをおさえた指導」に焦点をあてた自己評価の結果であるが、次年度に教育実習を控えている3年生としては、高い目的といえる。より実践力をつけたいという強い意志に裏打ちされた慎重な自己評価といえよう。

4) D「達成できなかった」の選択者：

教育実習実施後：3期 世界史 科目

動機・目的：「実習とは違い、少人数の生徒に勉強を教えるという経験がなく、自分にとって勉強になると思い、今回のインターンシップに参加させて頂きました。目標としては、生徒に歴史は面白いものだと感じさせ、興味・関心が持てる授業を行っていきたいです。」

理由：「理解させることが先決し、歴史のおもしろさに触れることができなかった。」

教育実習実施後：3期 世界史 4年

動機・目的：「私自身が絶対的に教師としての実践経験を持っていないからです。学生問わず、一度教壇の上に立ってしまったらプロフェッショナルとして行動しなければならず、また私自身もそのようにありたいと思っています。そのため教室の中で授業を展開すること、生徒とのコミュニケーションをとれる良い機会が今回のインターンシップだと感じ、参加致しました。」

理由：「簡潔にわかりやすい授業は展開したつもりだが、生徒にとって楽しく、教科に興味を持てる授業には到達できなかった。」

両者ともに、教育実習実施後の世界史担当者であるが、生徒の興味と理解の促進という、教師として重要でかつ難しい課題を再認識した反省的評価である。

全体を通して検討すると、肯定的（AやB）達成度を選択した学生と、否定的達成度（D）を選択した学生の差は、各人が自ら課した「目的」に即した結果となったかどうかによる。

さらには、たとえば、Aを選択した学生が必ずしも当初の自己のたてた目的を全面的に達成したわけでもない。一方で、第3期の世界史担当者2名が否定的達成度（D）を選択したことは、本人たちの能力以外に、教科の教育内容がもつ課題でもあろう。判断しかねている学生（Cを選択）はいずれも、自らの「目的」と厳しく対峙して「達成度」を分析している様子がみられる。

4-2-5 次回への参加意欲

教育実習を次年度に控えた参加者にとって、教育実習後にも参加する意欲があるだろうか。第

4期でのみ、教育実習未履修者に限定して尋ねた。

第4期 教育実習をこれから（次年度以降）履修する人にお尋ねします。教育実習を終えてからも、またこのインターンシップに参加したいと思いますか。その理由も述べてください。

選択性：参加したい 参加したくない（どちらかに○を） 理由：

20名中、回答対象者は17名だが、全員が「参加したい」を選択した。

以下に「理由」を記す。

「教育実習を終えて、様々学んだことをまたこのインターンシップを通じて生かすことができると考えます。また、実習先が中学校ということもあり、高校生と実際に触れ合うことのできるこの貴重な機会にまた参加したいと考えます。」（4期 英語 3年）

「教育実習を終えた後にインターンシップに参加する事で今気づけなかった部分に気づく事が出来たり、今以上に生徒への指導の仕方が上手に出来ると思うので、また参加したいと思います。」（4期 数学 3年）

「直接、高校生と接する機会がないので、教育実習以外において、インターンシップという形で参加することができると、より実践的な経験が身につくと思うため。また、自分自身、より教師に対する意欲も高まり、教師としての資質を身につけることのできる良い過程の1つであると思うため。」（4期 数学 3年）

「教員を目指すにあたって実践的な経験を積めるだけ積んでおいた方がいいと思うので、教育実習後もぜひインターンシップに参加させてもらいたいと思う。また、今回のインターンシップと教育実習後のインターンシップで自分がどれだけ変われているのかを見てみたい。」（4期 地理 3年）

「長期間の実習を終えた後の感覚を失くさない様にしたいのと、今回至らなかった点を補える形にして高校の講習をもう一度教えてみたいと思うからです」（4期 国語 4年）

いずれも、教育実習や教職への意欲を高めていることがわかる。

4-2-6 希望する研修・他の研修への参加希望・内容

学生が自ら必要と考える「研修」にはどのようなものがあるか。

1) 希望する研修

第3・4期 現在、教員免許取得のためには、大学での講義のほかに教育実習があります。学生でありかつ教師の卵の立場として、教師になるために必要だとあなたが考える大学生時代の「研修」（たとえば教育実習も広い意味でこれにあたります）内容について、具体的にお聞かせください。

第3期の回答から、内容を要約して箇条書きにする。

- ・今回のインターンシップ いろんな生徒と触れ合うことができるので
- ・多くの人と話す事、家庭教師塾アルバイト雑学職種問わないバイト
- ・多教科の生徒を対象に自分の教科を教えるといったような模擬授業形式のことが何度も行えるような研修があればいいと思う。
- ・模擬授業
- ・実習期間が短すぎ 小中高全ての学校で実習し、もっと子どもと触れ合う機会を増やすべき
- ・外部の教育団体との交流、セミナーへの参加促進
- ・実践の場を増やすこと
- ・授業見学
- ・教育実習前の学校現場の見学―採用試験への意識が高まるため
- ・専門的な研修、講義のみならず、実践的な職業体験（民間企業）

多様な提案がなされているが、模擬授業などの実践の場や、長期間の実習、多くの学校種での実習、学校の見学、などはもとより、民間を初めとする他の団体との交流・研修があげられている。参加者の多くは、教育実習のみならず他の機会を貪欲に得たいと切実に考えて参加している。

2) 他の研修への参加希望

一方、第4期ではスクールボランティアへの参加希望を尋ねた。

第4期 次年度以降、札幌市内の学校（小学校・中学校）でスクールボランティアを始められる可能性ができました。あなたも参加したいと思いますか？ またその理由、および希望する具体的内容について述べてください。

参加したい 参加できない （どちらかに○を）

理由：

希望する内容（例：部活指導 授業中のチューター など）

第4期計20名の参加者のうち、次年度採用内定者および科目等履修修了者の2名を除いた18名全員が、「参加したい」を選択した。

「希望する内容」には、上記枠内の例示として教科外指導と教科指導の例を提示したが、18名中3名(数学2名 英語1名 いずれも教育実習実施前)が教科指導に限定した内容を記載してきたが、他の15名(教育実習実施前13名 実施後2名)は教科・教科外指導の両者を回答した。その区別がどこからきているのかはわからないが、いずれの学生も参加を希望し、具体的な内容を想定したり、どんなことでもやってみたいという意味をもっていることがわかった。

これらより、参加学生はより多くの学校現場での研修を望んでいることが判明した。

4-2-7 学生アンケート以外から

1) 高校教科担当教諭による評価

第3期のみ、高校の教科担当教諭へのアンケートを実施した。複数項目を設定して回答いただいたが、おおむね学生への評価は良いものであった。

たとえば、「チューター(学生)による補充講習における高校生への教科指導の様子などを振り返り、お気づきの点(良い点・気になった点・改善を要する点、高校生の声 など)がありましたらお知らせください。」という項目に対しては、下記のような回答がなされた。

「同じ内容を扱っていても、各自が工夫しながら指導しており、独自のプリントを作成するなど、積極的な指導をしてくれました。生徒1人1人の表情を見ながら話ができるようになると、より深い指導ができるようになると思います」(英語担当)

「教材研究もしっかりやり、独自にプリントを用意して工夫しながら一生懸命指導する姿が印象的でした。途中、苦悩する様子も若干見られましたが、むしろ当然のことだとも思われ、今後の経験の部分が解決に導いてくれるものと思われれます。」(国語担当)

「少人数指導ということで、より綿密な指導が可能となっている。チューター1人1人の工夫により(自主教材、他チューターの授業見学など)成果は上がると思われる。」(国語担当)

「熱心に指導して下さいました。」(英語担当)

「要点をしっかり押さえていて、理解しやすい授業であったと思います」(地歴担当)

「(*前略)非常に満足しています。」(数学担当)

2) 学生の採用動向

公立の教員採用検査の場合、北海道の採用試験は7月上旬に1次試験(筆記試験)が実施され、4年生の参加者はその後、インターンシップに参加する。たとえば第1期(2004年度)参加者のうち1名は次のような経緯を経て採用登録者となった。

教員採用試験1次検査受検 → 第1期教職インターンシップ参加

→ 1次検査に通過 → 2次検査受検 → 採用登録通知到着

→ 第2期教職インターンシップ参加 → 2005年春 道立高校に赴任

また、第3期参加者のうち1名は同様にインターンシップ後の2次試験も通過し、現在2006年度採用登録者となっている。年度始めの段階では第4期の参加を希望していたが、近隣の学校に部活動のボランティアをつとめている関係から第4期の参加は見合わせた。2名とも2次検査には教職インターンシップの何らかの効果があつたのかもしれないが定かではない。一方、第1・4期あわせて参加した1名も2006年度春からの採用登録者となっている。

公立の教員採用検査に及ばず効果は、第4期3年生参加者が2006年7月の教員採用試験でどのような結果を出すかが1つの目安となるかもしれない。

一方、2004年度（第1・2期）参加者のうち複数名が、2005年度中にインターンシップ実施高校をはじめ札幌市内の私立・公立高校で時間講師として採用されている。特にインターンシップ実施高校での採用は実績を評価されての採用である。高校側としても、時間講師として適当かどうかを判断する材料として、実際に学生の指導の様子を見ていることは重要な指標となる。

5. まとめ ― 教員養成の一段階としてその意義をさぐる

以上の検討から、教職インターンシップが参加学生にとって有効な機会となったことは明らかである。

教育実習を履修する年度の学生（主に4年生）は、免許状取得のためにある程度準備が整っている学生である。そのような教職への準備・意欲が確実なものとなっている学生にとって、教職インターンシップは次のような意義をもつと考えられる。

教育実習がクラス運営・授業見学・実習・生徒指導…など、学校教育の総合的な研修の機会であるとすれば、実習で得たものを再確認または反省しながら、教育実習後にいくつかのさらなる課題を個別にアプローチする機会は、教師としての実践力向上につながる。たとえば、今回の教職インターンシップは、少人数相手の学力補充講習のチューターとして教科内容を教えることに特化した。それは第一に生徒の理解を促進する方法を探り、その過程で少人数の生徒との密接なコミュニケーションを図る方法を考えるなど、教育実習後に教科指導のあり方を中心に再度実践する場となっている。教育実習では機会のなかった少人数教育の方法も経験し、よりいっそうの教科指導方法を模索することとなった。アンケートを見る限り、学生にとっては明らかに有意義な機会となったことがわかる。

さて、教育実習実施前と後の参加者を比較したとき、立場によりそれぞれ目的や感想は異なるにせよ、各人がそれぞれの意義を得ていることが判明した。前述したように、教育実習実施後の参加者は教育実習を履修したことによって意識した課題等をもとに、教員としてのさらなる実践力を身につけ、経験を増やすために参加を希望し、特に教育方法やそれにとまなうコミュニケーションの方法の模索にこの機会を費やしている。

一方、教育実習を次年度に控えた参加者（主に3年生）は、プレ教育実習、あるいは教育実習とは異なる形態（少人数指導）を経験することになり、いっそうの教職への意欲を向上させたこ

とがわかる。決して教育実習前の参加が教職への不安を増大したり意欲が減退することがないことも明らかとなった。むしろ教職の仕事の重要性を再認識し、自らの課題を見出したといえるだろう。

教育実習を次年度に控えた3年生にとっての意義について、第4期を例に少し詳しく振り返ってみる。教職インターンシップ開始当初は教育実習実施後の4年生等を参加対象としていたが、教育実習を次年度に控えた3年生にも条件付きで参加対象とした。3年生の参加条件は原則的に、各教科教育法と教育実習実践指導を履修済みであることとした（最終的には面接して意欲があれば参加を許可した）。それらの講義では、指導案作成や模擬授業なども行われている。また、学生によっては自主的に模擬授業を行っている場合もある。第4期の実施時期（休日やクリスマスを含む）を鑑みても、第4期に参加を希望した3年生はもともと意欲のある学生が集まったといえる。これらの下地があるので、決して初日や2日目はその力が存分には発揮されなかったとはいえ、参加学生にとっては、意義ある機会となったといえる。むしろ最初の2日間は、教育実習の「授業見学」や「授業参加」に相当した期間といえるかもしれない。

今回の「教職インターンシップ」は、教育実習実施後や翌年に教育実習を控えた学生が、主に少人数形式で生徒の教科指導を行う、というものである。一方で、他大学で行われている従来のインターンシップやスクール・ボランティアは、教育実習前の実施のものも多く、授業以外の様々な教育場面を生徒に体験させるものがみられる。しかし、教育実習のメインともいえる授業実習と内容的に密接な関わりをもった研修として、「教職インターンシップ」は、1つの形を提示できたのではなかろうか。

ここで、残された課題をいくつかあげてみる。

- ・「教職インターンシップ」の教育実習実施前の参加者を、いかに初日から積極的な指導ができる体制にすることができるかその方法の模索
- ・運営方法のさらなる改善のため、学生代表を運営協議に加える方法の模索・ないしは大学内での懇談（第4期に参加した3年生のうち、次年度4年生として参加を希望する学生を中心に）
- ・単位化およびそれに伴う評価の方法
- ・本学の教職課程の現状をふまえた1、2年生の学校教育への何らかの参加方法 である。

付記：

北海学園大学教職課程「教職インターンシップ」は、実施高校の学校長をはじめ担当教諭の全面的な協力がなければ実施できなかった。両校担当者による多くの時間を費やした細部にわたる打ち合わせをはじめ、学生参加者対象の高校ガイダンス・授業見学・そして学力補充講習でのご指導は、意義ある教職インターンシップの実現に欠くべからざるものであった。ここに感謝申し上げる。

なお、執筆者は、2005年9月の日本教師教育学会第15回研究大会自由研究発表において主に第

1～2期についての実践報告を行った。本稿はそのときの報告と質疑、および第3～4期のデータを加え全体を再検討・再構成したものである。

注

- 1) その背景には、教職員養成審議会第3次答申などがあることは言うまでもないが、教員としての能力育成に必要であることは確かである。
- 2) 北海学園札幌高校からは、中島憲二校長と教務部長大西修夫教諭、田中秀幸教諭が、北海学園大学からは、2003年度教職課程小委員会議長松田光一と本稿執筆者前田輪音が協議を担当した。なお、両校ともに学校法人北海学園に所属しているが、互いに組織は独立しており、高校が大学の付属高校であるわけではない。
- 3) 授業づくりの理論と実践を学ぶ科目として、いずれも各教科ごとに設置している。特に「教育実習実践指導」は指導案作成・模擬授業などに重点をおく科目として設定している。免許取得の必要条件として、教科教育法は4単位以上、教育実習実践指導は1単位以上としている。
- 4) 全国私立大学教職課程研究連絡協議会第24回研究大会（2004年5月）の第2分科会「スクールボランティア(1)」での報告である。この分科会では、北星学園大学（大学と養護学校との連携）、東北福祉大学と東北学院大学（ともに大学と市教育委員会の連携）の各実践が報告された。なお、同研究大会では、第6分科会「スクールボランティア(2)」で、愛知大学、関西大学、立命館大学での実践について運営報告がなされたが、筆者は参加できなかった。
- 5) たとえば、岡野勉・住野好久・濁川明男・林尚示「国立の教員養成大学・学部における4年次教育実習カリキュラムの編成動向と課題」（新潟大学教育人間科学部紀要第6巻第2号人文・社会科学編2004年）が参考になる。
- 6) 黒崎東洋郎「『学校教員インターンシップ』の実践研究」（岡山大学教育学部研究集録 第127号2004）
- 7) 岡野勉他「教員養成カリキュラムとしての1年次教育実習——新潟大学教育人間学部「入門教育実習」における学びの諸相」（『教科教育学研究第22集』所収、2004）
- 8) 北海道教育大学釧路校地域教育連携委員会編『北海道教育大学釧路校の新しいボランティア実践——「釧路校方式」による学校支援・地域支援——』（2004年2月）
- 9) 2005年日本教師教育学会第15回研究大会自由研究発表第一分科会報告、および『北海道新聞』2006年1月21日(土)付第1面記事より
- 10) 参加者は通常、大学への通学定期券を購入している場合が多く、その範囲内で十分に間に合う位置に、「教職インターンシップ」実施高校が位置している。
- 11) 2005年12月から、札幌市教育委員会担当者と本学教職課程2005年度議長松田光一他が数度の打ち合わせを行い、北海道教育大学と札幌市教育委員会が連携して行っている「スクールボランティア」に、本学も加わることにについて協議が進められた。2006年2月3日の時点で、年度内に文書を取りかわし、2006年度より実施する予定である。
- 12) 原清治・芦原典子「実践的教員養成のあり方に関する研究——スクールボランティアと教育実習の関係から」（佛教大学教育学部『教育学部論集』第16号2005年3月発行所収）、「スクールボランティアの『効果』に関する実践的研究Ⅱ——教育実習修了者に着目して」（日本教師教育学会第15回研究大会2005年9月 自由研究発表第1分科会）
原・芦原は、佛教大学で行っているスクールボランティアが学生にとって教育実習にむけてどのような「効果」があるのかを数量的な手法により検討している。すなわち、教育実習前と後のいずれかにおいてスクールボランティアを行った学生、両時期に行った学生、全く行わなかった学生の比較調査研究を進め、いずれの時期・内容・形態が教育実習にとってより効果的かどうかを検討されている。

教職課程履修中の学生全体の中から希望者が参加しており、ボランティア期間は長期・短期、内容は学習支援とその他、場所も学内・学外、と、多岐にわたっている。

13) 注11 原・芦原 (2005.3) p.143

14) この調査研究は現在継続中で、教育実習後に参加した学生の調査を含めた全容が近日中にまとめられる予定と聞く。

15) いずれも本学の卒業生であり卒業時に教員免許を取得している。当時、卒業後、教職に就くことを希望していた学生であり、1名は現在、札幌市内の私立高校に常勤として採用され、他1名は2006年度北海道公立学校教員採用登録者である。

16) 他、1名が参加したが、この学生は、サマーキャンプと補充講習1日のみの参加のため、分析対象から除外した。

17) 1・2期継続して参加できなかった学生もいる。その要因は卒業論文や日程の都合など様々であり、その学生の第1期アンケートや日誌から考えても、教職インターンシップに対しての不満や意欲のなさが原因では必ずしもない。

18) 第4期「反省会」の直後に、担当教諭に執筆者が口頭でうかがった。